

芝古墳（芝1号墳）現地説明会資料

平成26年11月8日

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査地：京都市西京区大原野石見町632-3

調査期間：平成26年10月1日～11月下旬（予定）

はじめに

芝古墳は、京都市西京区大原野石見町632-3に所在する前方後円墳です。京都市では、古墳の保存を図るため、昨年度から国庫補助事業として芝古墳の調査を行ってまいりました。昨年度の測量調査に引き続き、今年度は古墳の規模を確定させることを目的とした発掘調査を実施しております。その結果、芝古墳を考える上での基礎的な情報を得ることができました。

芝古墳群の概要

芝古墳群は、京都市と長岡京市にまたがって分布している古墳群で、現在までに方墳1基・円墳12基・前方後円墳1基の計14基が確認されています。このうち、5基の円墳は長岡京市側に点在しています。芝古墳群の1基からは埴輪の出土が伝わっており、また横穴式石室が2基、直葬系の埋葬施設を有すると推定されるものが2基存在しますが、いまだ本格的な調査は実施されておりません。また、芝古墳群で唯一の前方後円墳である芝古墳は、周辺の井ノ内車塚古墳・稲荷塚古墳と共に、この地域における首長墓と考えられてきた重要な古墳ですが、これまで測量調査が行われたのみで遺物等も発見されておりません。そのため、芝古墳の位置付けは流動的なものととどまっています。

調査成果

1 トレンチ

後円部北裾と周溝の有無を確認するためのトレンチです。調査の結果、標高49.2m付近で後円部北裾と考えられる傾斜変換点を確認しました。また、地山を掘り込んで作られた溝を検出しました。この溝は、幅約2.5mで深さが1mほどの規模で、古墳に伴う周溝の可能性あります。加えて、墳丘を構築している盛土も確認することができました。

2 トレンチ

後円部西裾の確認と、墳丘斜面の様相を確認するためのトレンチです。調査の結果、標高49.1m付近で後円部西裾と考えられる傾斜変換点を確認しました。加えて、このトレンチでも1トレンチと同様、墳丘の盛土の様子を観察することができました。また、特筆すべき点として、埋葬施設に伴うと考えられる石組の遺構を検出しました。この石組遺構は、立位に据えた2枚の側石の上に、平らな人頭大の礫を蓋石としてのせた構造をとっています。現時点で断定はできませんが、排水溝の可能性あります。

3 トレンチ

後円部東裾の確認を目的としたトレンチです。その結果、芝古墳の墳丘東側は、江戸時代以降に墓地として利用されていたことが明らかになりました。これらの土地利用の結果、後円部の東裾は既に破壊されたものと考えられます。しかし、トレンチの北壁では、周溝とみられる溝を確認することができました。この溝は、幅3.6mほどの規模となります。ほかのトレンチで墳丘裾と周溝の肩口が非常に近接していることを踏まえるならば、後円部東裾の位置は標高49.1m付近に位置したともと推定されます。

4 トレンチ

前方部前面裾の位置を確認するためのトレンチです。標高48.5m付近で前方部前面裾を確認しました。また、前方部前面の斜面にも後世の墓が作られ、墳丘が破壊されていることが判明しました。

遺物

墳丘とその周辺から埴輪が表面採取されています。また、各トレンチでも埴輪片が出土していますが、その量は少なく原位置を保っているものではありません。現時点では、円筒埴輪と朝顔形埴輪を確認しています。表面採取した埴輪と各トレンチで出土した埴輪は特徴が類似していることから、ともに芝古墳に伴う遺物と考えられます。これらの埴輪から、芝古墳の築造時期は古墳時代後期初頭（6世紀初頭）と推察されます。

まとめ

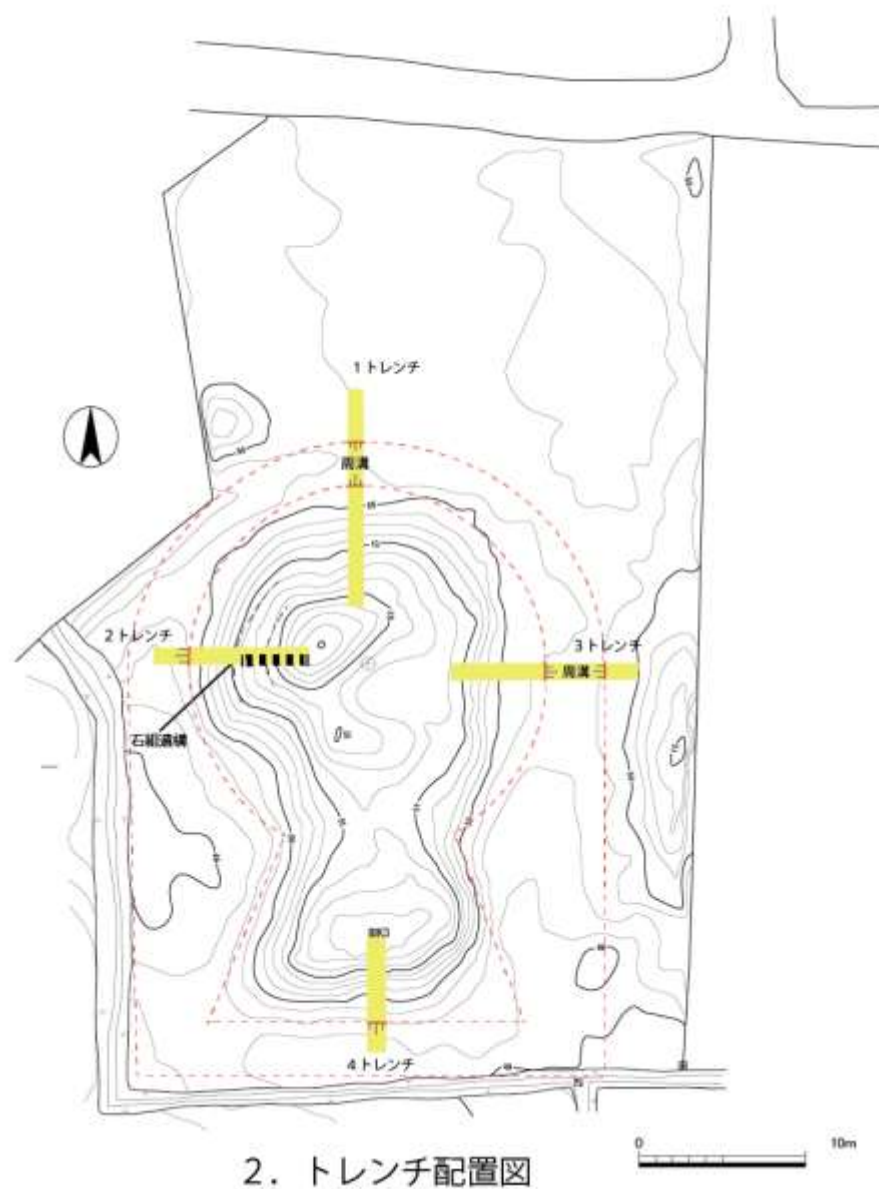
今回の発掘調査では、芝古墳に関する以下のような知見を得ることができました。

- 墳丘の規模が確定した（墳丘長約33m）
- 芝古墳に埴輪が存在することが判明した
- 埴輪から芝古墳の年代が具体的に推定できるようになった（6世紀初頭）
- 墳丘を構築する盛土の様相が明らかになった
- 埋葬施設に伴うと考えられる石組遺構を確認した

これらの成果から、芝古墳をより具体的にこの地域の首長墓として位置付けることが可能となりました。今後、後続する首長墓とみられる井ノ内車塚古墳・稲荷塚古墳や、この古墳を造営した人々の集落とみられる大原野石見遺跡や上里遺跡と併せて検討していくことで、より具体的な地域史が復元できるかもしれません。



1. 芝古墳の位置



2. トレンチ配置図



3. 芝古墳の全景 (手前が前方部)



4. 表面採取した埴輪



5. 石組遺構 (2トレンチ)